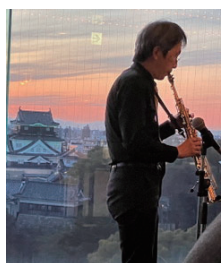




岡本 裕巳 分子科学研究所 名誉教授
(分子研在籍時 メソスコピック計測研究センター 教授)

新しいことに挑戦する場に

おかもと・ひろみ／3月の退職後、自宅は東京に転居しましたが、夏の暑いときは信州の山荘を拠点にして、研究業務の残りの傍ら、ワンコの散歩、庭の草刈り、薪割り…をしています。寒くなったら東京の自宅に戻ります。



去る3月の退職にあたっては、最終講義とパーティーを催して下さり、有難うございました。東大理・化学科の同級

生でもあった横山さんと合同でできて良かったです。さらにその翌日には研究で縁のあった皆さんで研究会とパーティーをもう1ラウンド開催していただきました。そのパーティーでは演奏のご提案も受けて節操なく引き受けてしまい（更には戦略室の太田さんも巻き込んでしまい）、夕暮れの岡崎城をバックに、皆さんを拙い演奏に付き合わせてしまいました。おかげさまで大変楽しい2日間を過ごしました。

定年退職したのに、何故かまだ、時間に追われて仕事をしている状況です。秋くらいになると少しは緩和するかも

しませんが。とはいえ、現役の頃と違って、居場所を縛られる時間は大幅に減っているので、その意味では自由に過ごしています。時間の余裕ができたなら、退職間際に発想したキラル光学の新実験手法の基礎固めの考察を再開したいと思っています。

私は2000年の11月から、25年半近く分子研でお世話になりました。1985年からの5年間にも助手として在籍したので、合わせて30年間強、分子研で研究活動をさせていただいたこととなります。教授として赴任する前は、フェムト・ピコ秒振動分光を生業としていましたが、赴任の機会に大きく方向転換することにして、ナノ光学・イメージングを用いた研究にシフトしました。この領域の研究経験はそれまで全く無く、成果が得られるかどうか不明だったにも関わらず、私を採用してスタートアップの予算もつけて下

さいました。分子研でなければこんな乱暴なプロポーザルの採用と投資は不可能だったと思います。お陰でそれなりに新しい研究の創出、成果を上げることはできたかなと思います。研究期間の後半ではその展開の一方向として、ナノ・マイクロ物質のキラル光学効果の研究に移り、新領域の開拓で二度にわたってワクワクする経験の幸運を味わうことができました。

分子研は新しいことに挑戦できる場としての伝統が受け継がれていると思います。助教や准教授のみならず、教授にも新しい領域への方向転換のチャレンジを許す文化が、これからも続いていくことを願っています。このような機会を与えてくれた分子研関係者の皆様には大変感謝しております。ありがとうございました。

加藤 政博 広島大学 特任教授 (分子研在籍時 極端紫外光研究施設 特任教授)

テニスコートの地下で四半世紀

かとう・まさひろ／高エネルギー加速器研究機構の放射光施設Photon Factoryの助手に着任したのが1986年のことです。高エネ研、分子研、広島大とずっと放射光施設の現場で働いてまいりました。これらの施設の加速器は職員が交代で運転当番に当たります。私は1986年以来40年間、加速器の運転当番から外れたことがなく、今でも広島大学の加速器の運転当番が回ってきます。現職もあと2年弱で終了しますので、ようやく加速器の現場から離れますが、そのあとボケてしまわないだろうか、というのが少し気がかりです。



私が分子研にやってきたのは、20世紀も最後の西暦2000年の春でした。家族4人でつくばから引っ越してきましたが、その後末っ子が岡崎で生まれて、5人家族で宿舎で長く暮らすこととなりました。岡崎に引っ越すにあたり家内に聞かれたのは「買い物するところはあるの?」でした。「駅に岡ビル百貨店というのがあったんだ」というのが当時の私の珍答?でしたが、その岡ビル百貨店も取り壊されてしまいましたね。3人の子どもも、皆、無事成長し、岡崎を離れました。研究ですが、UVSORという電子加速器で光を作ることにずっと取り組んでおりまし

た。夕方、皆さんがテニスを楽しめるテニスコートの地下にUVSOR加速器があります。そこで四半世紀、楽しく研究をやらせていただきました。分子研の共同利用の様々な仕組みを活用し、所内外の多数の方々と幅広く共同研究を行うことができました。UVSORは放射光施設としては小規模であるため、光を作る我々とそれを使う利用者の距離が近く、利用者の皆さんとの交流を通じてたくさんの研究の種を見つけることができました。UVSOR以外では、短い期間でしたが、装置開発室の室長を勤めさせていただきました。研究を支える技術部門の重要性を改めて

認識する得難い機会となりました。数年前に本務を広島大学に移し、クロスアポイントメントで分子研を兼務させていただいておりましたが、それもこの3月で終了しました。肩の荷が下りたような体が軽くなったような感じとともに少し寂しいような気持ちもありますが、施設の研究体制・運用体制はしっかりと維持されており、安心して去ることができます。UVSORがますます発展していくことを確信しております。本当に長い間お世話になりました。ありがとうございました。

倉持 光 大阪大学 大学院基礎工学研究科 物質創成専攻 未来物質領域 教授 (分子研在籍時 協奏分子システム研究センター 准教授)

分子研の日々に、ただただ感謝

くらもち・ひかる／2013年東京工業大学 大学院理工学研究科 物質科学専攻 博士課程修了、理学博士。2013年理化学研究所 基礎科学特別研究員、2016年理化学研究所 量子工学研究領域 研究員、2017年科学技術振興機構 さきがけ研究員、2020年分子科学研究所 協奏分子システム研究センター 准教授を経て、2025年4月より現職。



現在では「令和元年東日本台風」と称されているそうですが、その過去最大級の台風が本州に迫り、翌日には新幹線がほぼ確実に止まるだろうと見込まれる中、面接の二日前に豊橋に移動し、準備に励みました。「面接でホームラン打ったもんが勝ちやからな!」と某氏から力強いアドバイスをいただいていたものの、極度の寝不足のせいか、

面接でホームランを打てたのか、あるいはどうにか内野安打になったのか、その記憶もなく、台風一過の晴天の下、「早く帰って子供と遊ぼう」と分子研正面口の前の階段を駆け下りたことだけが、昨日のことのよう思い出されます。

その後、分子研には五年間、兼任期間も含めると六年間お世話になりました。思いがけずコロナ禍での着任と

なり出張も少なく、研究室の立ち上げに集中することができました。分子研ならではの、意思決定の自由度が高く、ある意味でリミットがない中で、実験室のデザインや装置の選定、今後何に取り組むかを考えるのに多くの時間を費やせたことは（今から思えば効率が悪かったかもしれませんが……）、本当に有意義でした。分子研では、研

研究所全体に貫かれた「物理化学をはじめとする学問への真摯な姿勢と厳格さ」をとにかく強く感じました。その中で、自身の研究を見つめ直し、今後の研究について頭をひねり、もがき苦しんだことは、良くも悪くも分野の枠にとらわれにくかった前職の理化学研究所ではできなかった経験であり、大いに鍛えられました。悩んだ末、結局のところ、自分が心から「面白い」と信じる研究に全力で邁進しよう、という結論に至るのですが、それもまた、日本の物理化学のメッカである分子研でしか得られない、かけがえのない経験でした。

岡崎では、研究面では好きなことに思う存分取り組みさせていただき、私生活では以前より多くの時間を家族と過ごし、三河を満喫しました。今思え

ば非現実的で、夢のような日々でした。装置の搬出準備のために岡崎を訪れ、東岡崎駅に降り立つと、帰省した気になり、いつの間にか第二の故郷になっていることに気付きます。長女も、岡崎で生まれた次女も、今でも岡崎が大好きで、まだまだ大阪より好きなようです。長い人生から見ればたったの五年ともいえますが、私にとって最も大きな意味を持つ時間だったように感じられ、振り返れば、まさに命の洗濯ともいうべき日々であったように思います。分子研で得た貴重な経験を糧にさらに飛躍し、いつか分子研に恩返しできるよう、大学で研究と教育に邁進していく決意です。

最後になりますが、研究室の立ち上げから異動まで多大なご支援をいた

だいた川合前所長、渡辺現所長、秋山センター長に、心より感謝申し上げます。秘書の伊藤さん、神谷さんなしには、研究室は成り立ちませんでした。助教の米田さん、特任助教の古賀さんは、私にはもったいないほど本当に頼もしい存在で、二人に支えられて研究を進めることができました。総研大生の落合さんは、私の想像をはるかに超える成長を見せてくれ、学生と一緒に研究することの楽しさを教えてくれました。ここに挙げた方々をはじめ、公私にわたりお世話になった分子研の皆様に、厚く御礼申し上げます。さまざまなことを思い出しているうちに、なんだか視界が霞んできましたので、ここで筆を置くことにします。

Sylvain de Léséleuc

理化学研究所 量子コンピュータ研究センター チームディレクター
(分子研在籍時 光分子科学研究領域 特任准教授)

On Leaving IMS

Born in 1990, France. PhD in 2018, University Paris-Saclay, Institut d'Optique. Assistant Professor (2019-2023), Research Associate Professor (2023-2025), Visiting Researcher (2026~) at IMS, Ohmori group. Team Director (2024~) at RIKEN Quantum Computing Center where I lead the Cold-Atom Quantum System Research Team.



I joined IMS in March 2019, and spent 7 amazing years growing as a researcher in this fabulous environment. Seven years is the longest that I have ever spent in the same institution in my life so far! It is thus quite painful to leave, as I became strongly attached to the place and its people, and it is so fun to do research here.

In the first few months, I remember often walking around the campus (the various trees, especially the pines, are very relaxing for me) or towards

Otogawa river as I was adjusting to this new life or thinking about research problems. The first years, I enjoyed much spending days in the laboratory with my three colleagues, learning how to manipulate atoms with lasers. After getting our first major results (making atoms “speak” to others in an ultrafast timescale of just a few nanoseconds, a new world-record !), my work life gradually changed. I started to recruit new students and researchers to work with us, and spent less time using my own hands for doing the physics and

more on training and discussing with my teammates. I realized that I liked this very much also.

As numbers grew, I also learned how to organize efficiently the structure and operation of a group, not only the researchers but also the technical and administrative staffs which are crucial for a smooth operation. The Ohmori group is now strong of 30-40 members (four times more than when I started !). It is rewarding to see them work happily everyday, and orient everyone's effort towards our long-

term research goal. With such a team, you can take on incredible challenges that are not possible if you work alone, like the development of quantum computers.

My biggest joy is that many others could join me at IMS and work together: more than 50 students and researchers, and 15 technical and administrative staffs, have joined from

a few months to several years. I know that they will, like me, all remember IMS as a place where they personally grew and a unique experience in their life.

I would like to thank everyone at IMS and Okazaki that made this stay so memorable, I cannot list them all as it would be longer than this article allows! Every time that we had an idea (move

a quantum computer from US to IMS, do a Nagashi-somen party, organize a 100-people symposium, ...), I could always find help and people to do it with me.

We will keep seeing each other as I could get a Visiting Researcher position to come whenever I find time!

荒木 暢 豊田中央研究所 主任研究員
(分子研在籍時 極端紫外光研究施設 主任研究員)

「勝手知ったる母国」の先で見つけたもの

あらき・とおる／北米(6年)、国内民間企業(5年)、英国(11年)、分子科学研究所(3年)を経て現職。一貫してユーザーや施設スタッフの立場で放射光研究に携わる。現在はSPRING-8のアップグレードに伴い、豊田ビームラインの更新計画に携わっています。



10年という歳月を経てようやく馴染んできた英国の暮らし。それを手放してまで待ち望んだ母国への帰国でしたが、いざ戻ってみると、そこに「勝手知ったる我が家」の心地よさは感じられませんでした。

おそらくその感覚は、初めて日本で暮らし始める外国人が抱くカルチャーショックとも違っていただと思います。住み慣れていたはずの母国で、いつの間にか自分だけが「異邦人」になってしまったかのような、不思議な孤独感でした。

亡き恩師ゆかりの分子研でなければ、そもそも帰国することもなかったと思います。2023年1月に着任し、最初の仕事が同年11月に迫ったUVSORの40周年記念事業と、その後の次期施設計画への取り組みであったことも、これも何かの運命的な縁だったのかもしれません。

外に出てしまった者の言うことでは

ないのかもしれませんが。それでも、せっかくの有能な人材が疲弊することなく相応に報われるためには、現在進められている技術職員や事務方の待遇改善が、よりスピード感をもってなされることを切に願っています。

老朽化した装置やインフラの更新はもちろん重要ですが、それ以上に人員の増加が不可欠です。それが一筋縄ではいかないことは重々承知していますが、待遇改善を図り、有能な人材にとって魅力ある研究所であり続けるためには避けて通れず、ひいては人材の確保と育成の根幹に関わる課題だからです。「国内では…」という言い訳はもはや通用しません。研究内容だけでなく、組織のあり方においても常にグローバルな視点を持つべきだと考えます。

岡崎で出会った方々は皆さん有能で、親切で、頼りになる素晴らしい方ばかりでした。だからこそ、それを知るユーザーは単に高性能で最新の装置だけを

求めて来るのではなく、手厚いサポートや、自らの課題に共に挑んでくれる熱意を期待して岡崎へと足を運ぶのだと思います。その期待に応え続けるためにも、現場のスタッフが精気に満ち、笑顔で生き生きと仕事ができる環境づくりこそが何より重要なのです。

戸惑いの中からのスタートではありましたが、3年余りの岡崎での日々を乗り越え、無事に過ごすことができたのは、UVSORをはじめとする皆様の温かいお気遣いのご協力があったからこそです。心より深く感謝申し上げます。

私もまた困った時には、あの素晴らしい笑顔の皆さんにお会いできることを願っております。短い間でしたが、本当にお世話になりました。

小杉 貴洋

金沢大学医薬保健研究域薬学系 准教授
(分子研在籍時 協奏分子システム研究センター 助教)



大きな恩の、その先へ

こすぎ・たかひろ／2012年京都大学大学院理学研究科化学専攻にて博士（理学）を取得。2012年4月よりワシントン大学にて日本学術振興会海外特別研究員、2014年4月からは博士研究員。2015年6月より分子科学研究所において助教。2026年3月より金沢大学医薬保健研究域薬学系において准教授に就任し、生体分子設計学研究室を主宰しています。

分子研では10年以上という長い時間を過ごし、2026年3月にやっと転出することができました。その間には様々な出来事があり、少し思い返しただけでも、たくさんの思い出が蘇ってきます。

分子研では、多くの先生方のお世話になり、恵まれた環境で研究活動を行わせていただきました。特に自由に研究を行わせてくださった古賀教授に感謝しています。古賀Gの皆さまにもとてもお世話になりました。共同研究者として、分子研での代表的な成果となる研究と一緒に進めてくださった飯野教授や飯野Gの皆さまにも大変お世話になりました。ありがとうございます。大学に異動したことで、非常に恵まれた環境で研究できていたことを改めて実感しているところです。

楽しいことだけでなく、苦しいことや大変なこともたくさんありまし

た。川合機構長や何名もの教授の先生方に、特にお世話になった時期もありました。ここ数年は所属グループが無い身分となりました。そんな私にも変わらず研究活動を続けさせてくださり、いつも暖かいご助言を与えてくださった渡辺所長には深く深く感謝しております。一人で研究・転出活動が続ける自分に、いつも厳しい言葉をかけてくださった秋山教授にも大変感謝しております。教授会では、先生方が研究期間継続を真剣にご審議いただいていたことも伺っております。ありがとうございました。たくさんの良い仲間にも恵まれて、技術支援員の鈴木規子さんの助けもあり、一人になっても研究をさらに発展していくことができました。秘書の鈴木博子さんをはじめ、多くの事務職員の皆さまにも大変お世話になりました。全ての皆さまにとっても感謝

しております。本当にありがとうございました。

分子研では研究者として自分が大きく成長することができたと思います。素晴らしい環境であったため、正直なところ、ずっと分子研で研究を続けさせていただけたらと思うこともありました。そのため、分子研を去る時は本当に寂しかったです。ただ、今では前に進むことができ本当に良かったと思っています。これから分子研での経験を活かし良い研究・教育を行っていくことで、さらに成長した姿をみなさまにご報告できたらと思います。そして、分子研の皆さまに頂いた大きなご恩を少しでもお返ししていけたらと思っています。長い間大変お世話になりました。ありがとうございました。

佐藤 拓朗

東京大学大学院工学系研究科 准教授
理化学研究所創発物性科学研究センター ユニットリーダー
(分子研在籍時 協奏分子システム研究センター 助教)



濃密な5年間

さとう・たくろう／2017年、東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻で博士号（工学）を取得。その後、理化学研究所創発物性科学研究センター特別研究員、分子科学研究所山本グループ助教を経て、2026年4月より現職。

新型コロナウイルスの影響で世界中が混乱していた2020年、私も分子研の助教公募に思い切って挑戦し、慌ただしく落ち着かない日々を過ごして

いました。幸いにも採用していただき、山本浩史先生のグループに着任することになりました。妻と、当時まだ1歳だった長女との3人で、わくわく（そ

して少しそわそわ）しながら岡崎にやって来た日のことを、今でも鮮明に覚えています。あれから5年が経ちましたが、振り返ってみれば本当にあっという間

で、すばらしく濃密な時間でした。

山本グループでは、CISS効果という、ちょうど世界的にも注目を集め始めていた研究テーマに関わらせていただきました。このような大きな研究テーマの黎明期に携わることができ、さらに、それを独創的な視点で切り開いていく山本先生のもとで研究できたことは、私の人生における最大の幸運でした。山本先生には、言葉ではとても表しきれないほど感謝しています。成果という形でなんとか研究室に貢献したいという思いで、日々頭をフル回転させながら（傍からはそう見えなかったかもしれませんが）取り組んできました。

また、川合眞紀前所長、渡辺芳人所長をはじめ、分子研でお世話になった装置開発室、機器センター、事務セ

ンターの皆様に、心より感謝申し上げます。特に装置開発室の皆様には、私の曖昧でふわっとした依頼に対して、いつも想像をはるかに超えるクオリティーの仕事を返していただき、そのたびに驚かされていました。さらに、助教としてともに研究した広部さん（現・静岡大）、鍋井さんをはじめ、山本グループの皆さんからは、いつも多くの刺激をもらいました。研究の議論はもちろん、何気ない雑談も含めて、一緒に過ごした時間は本当に貴重でした。

最後になりますが、助教の面接の際、山本先生から「将来、どのような研究者になりたいですか？」と尋ねられました。正直、まったく想定していなかった質問だったもので混乱した結果、「他

の実験家や理論家を、あっと驚かせるような実験をする研究者になりたいです」と、なんとも締まりのない回答をしてしまったことを覚えています。今の自分には、そのような研究をするにはまだまだ実力が足りませんが、いつかこの少し気恥ずかしい発言を現実のものにできるよう、これからも研究に励んでいきたいと思います。

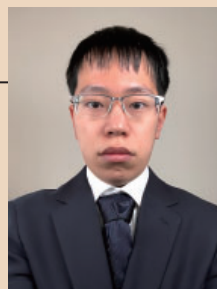
今回、「分子研を去るにあたり」というテーマで書いていますが、実は今後数年間は分子研の研究プロジェクトに参加させていただく予定で、ちょくちょく顔を出します。「去る」というよりは「席替え」くらいの気持ちです。これからもどうぞよろしくお願いします。

佐藤 祐輔

民間企業
(分子研在籍時 極端紫外光研究施設 光物性測定器開発研究部門 助教)

離職にあたって

さとう・ゆうすけ／2024年3月東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士後期課程修了、博士（理学）。
2024年4月-2026年3月分子研、2026年4月より民間企業。



2024年3月に東京大学にて博士号を取得後、御縁があり2024年4月より分子研UVSORにて助教として勤務いたしました。本来であればあと3年は所属しているところではありましたが、一身上の都合により分子研を去り、民間企業へと移ることになりました。分子研での勤務中は背広を着ることは一度もありませんでしたが、民間では折りに触れて背広に準ずるものを着ることがあります。本稿に掲載した写真もその一環です。

学生時代に放射光施設をユーザーとして利用することはあれども、実際

にビームラインを運営する側、また部分的に運転にも携わる側として参画するのは初めての経験であり、当初は右も左もわからない状態ではありました。そのような状態でも無事に勤務を続けることができたのは、ひとえに分子研及びにUVSORのスタッフの皆様方のご支援ご助力等があったことでした。また放射光の運転側（といっても蓄積リングのシャットダウン等だけですが）に関わる事ができるのは他の大型放射光施設ではほぼできないであろうことであり、非常に貴重な経験を積むことができたと感じております。在籍期間

中はUVSORのWebページのデザインの更新や、UVSOR若手の会の運営等を実施しておりましたが、これらが微力ながらスタッフの皆様への恩返しになっていれば幸いです。

今後はアカデミアや放射光とはまた違った分野でキャリアを形成することになりますが、分子研で学びましたことを今後のキャリアへと活かしていきたい所存であります。最後にはなりませんが、分子研UVSORのスタッフの皆様方に重ねて御礼申し上げることにより、結びとさせていただきます。2年間大変お世話になりました。

古賀 雅史 大阪大学 基礎工学研究科 特任助教
(分子研在籍時 協奏分子システム研究センター 特任助教)



分子研での一年半

こが・まさふみ／2021年大阪大学 基礎工学研究科にて博士（理学）の学位取得。UC Berkeley (Neumark Group) にて、JSPS海外特別研究員期間を含む3年半の博士研究員の期間を経て2024年10月より分子科学研究所 特任助教。2026年4月より現職（大阪大学）。エセ関西弁が戻ってきました。

2024年10月から2026年3月までの約1年半、協奏分子システム研究センター 倉持グループの特任助教としてお世話になりました。弊研究室の移籍に伴い現在は大阪大学の同グループで研究を継続しています。本当に不思議な縁で、私が博士課程を過ごした居室にこうして戻ってくることとなり、不思議な気持ちです。現在は多くの学生に囲まれながら日々奮闘しています。

博士取得後約3年半カリフォルニア州UC Berkeleyで過ごし、分子研着任に伴い帰国しました。伝統ある公立大学らしい老朽化した校舎と現代社会のあらゆる問題を詰め込んだパークレーの街並みに別れを告げ、素晴らしい研究環境、閑静な街並みとイオンモールのある街に移ってきた感動を鮮明に覚えています。

研究環境について振り返ると、分子研

は高いレベルで研究を遂行するための体制・設備があらゆる面で整えられていたと感じます。装置開発室をはじめとした手厚い技術的サポートには大変お世話になりました。また、研究第一に動いてくださる事務員の方々の存在によって妥協ない研究遂行が可能になっていることを度々感じました。特に着任前からややこしいことにも様々ご対応していただきました倉持グループ秘書の神谷さんにはこの場を借りて深く御礼申し上げます。これらの決して当たり前ではない研究環境の中で集中して研究に取り組むことができ、所内の研究者の方々と交流することで大いに刺激を受けながら「良い研究とは何か」という自身の視座を高めることができました。

また、着任のタイミングで子供が誕生し、家族が増えたことで分子研での日々はそれまでの研究生活とは全く違

うものになりました。慣れない土地で初めての育児を行なっていくことへの強い不安は、倉持さんはじめ多くの方々のサポートのおかげですぐに払拭することができました。特に岡崎3機関保育施設であるさくら保育園には長い間大変お世話になりました。先生方には子供のあらゆる些細な変化を気にかけてもらい、園のお姉さん達や月齢の近い仲間達に揉まれながら成長する子供を安心して見守ることができました。成長著しく、よく喋りよく歌うようになった今の子供を見ると当時のことをとても懐かしく思います。園長の石原先生や園の皆様にはこの場を借りて深く御礼申し上げます。

最後に、短い間でしたが分子研内外でお世話になった多くの方々に心より御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

水川 哲徳 (分子研在籍時 極端誌紫外光研究施設 技術支援員)



アナログからデジタルへの43年間

みずかわ・てつ のり／農水省勤務を経て平成4年4月より分子研勤務。錯体化学実験施設→分子スケールナノサイエンスセンター→機器センター→UVSOR。令和8年3月退職。現在、晴耕雨読状態。

平成4年（1992年）4月、私は分子研に着任しました。31歳の時です。そして令和8年3月再雇用が終了し、分子研を去りました。

分子研に来る前に私は9年間農林水産省に勤務しておりました。分子研時代とトータルすると43年間です。その43年間で世の中の変化に伴い業務の形

態は大きく変化しました。

農水省初出勤の日、私の机の上に置かれていたものは次のものでした。算盤、ボールペン、集計用紙、起案書そ

して法規集等。その当時は一般にPCが普及しておらず、私の職場にもPCは配備されていませんでした。PC普及以前の時代、業務は全てアナログ作業でした。今ではExcelで行っている表計算をその頃は手計算で、集計用紙に手書きで記入していました。最初のうちは支給された算盤を使っていましたがそのうち電卓を使用するようになりました。文書もほとんどが手書きで、た

まに英文タイプライターや和文タイプライターを使っていました。文書を手直しする時には書き直しが基本でした。アナログを全否定するつもりはありませんが手作業の表計算と和文タイプライターの使用は二度とごめんこうむりたいです。農水省8年目でやっと職場にパソコンが配備されるようになりました。30人につき2台です。その後分子研に移りましたが当初はまだイン

ターネットが導入されていませんでした。その後3～4年後でインターネットが導入され、e-mailアカウントが割り当てられました。

40数年間の経過で業務形態に大きな変化があるのは当たり前です。もっと短いスパン、20年程度でも大きな変化があるでしょう。変化の中には後戻りが出来ない類のものもあります。変化の方向性を読むことが大事でしょう。

IMS café



NEW STAFF

新人自己紹介

2025年12月1日着任

深 田 亮 平

ふかだ・りょうへい

協奏分子システム研究センター
機能分子システム創成研究部門 特命専門員

2025年12月より、ERATO山本量子キラル変換プロジェクトの研究推進員として着任いたしました。新しい環境で学ぶことの多い毎日ですが、周囲の皆様に支えていただきながら業務に取り組んでおります。研究者の皆様が研究に集中できる環境づくりを通じて、プロジェクトの推進に少しでも貢献できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

2026年1月1日着任

吉 田 朋 子

よしだ・ともこ

極端紫外光研究施設 光物性測定器開発研究部門
教授 (クロスアポイントメント)

1996年 京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了(工学博士)、1996年 名古屋大学工学部助手、2003年 名古屋大学大学院工学研究科助教授、2009年 名古屋大学エコトピア科学研究所准教授、2015年 大阪公立大学複合先端研究機構教授・人工光合成センター副所長、2024年～現在 名古屋大学大学院工学研究科総合エネルギー工学専攻教授、2026年 分子科学研究所 教授 (クロスアポイントメント)。※詳細はP.19をご覧ください。